

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ (三八)

第三五則 洛浦伏膺

〔示衆〕

衆に示して云く、迅機捷弁もて外道や天魔を折衝させ、逸格超宗もて曲しく上根利智の為にす。忽し箇の一棒にて打てども頭を廻らさざる底漢に遇う時は如何ん？

〔本則〕

挙す、洛浦、夾山に参す、礼拝せずして当面に立つ（相違うも馬を下りざるは各自に前程あればなり）。山云く、鶏の鳳巢に棲むは、其れ同類に非ず。出て去け！（一）手は推し一手は拽く。浦云く、遠き自り趨風たり。乞う師の一接を（探竿は手に在り）。山云く、目前に闍梨なく、此間に老僧もなし（影草は身に随う）。浦、便ち喝く（尽筋截力れり）。山云く、住めよ住めよ、且あ草草忽忽なること莫かれ！（会者は不忙、忙者は不会）雲月は是れ同じなるも、溪山は各おの異なれり（斜街暗巷に生客頭が迷う）。

天下人の舌頭を截断することは即ちなきにあらず（只だ錐頭の利のみを見て）、争でか無舌の人をして解語せしめん？（鑿頭の方を見ず）浦、語なし（長蛇陣前で弓鞘は撲地り）。山、便ち打つ（意わざりき夾山、却って臨済に作らんとは！）。浦、此れ従り伏膺う（芸、当行に圧れり）。

参禅会発足三五周年にちなんで、第三五則を選びました。登場人物は夾山と洛浦。禅門系譜の上では、青原一石頭―薬山―船子―夾山―洛浦ですから、青原下五・六世の禅哲たち、時代は唐末です。『従容録』では、夾山はほかに第六八則「夾山揮剣」、洛浦は第四一則「洛浦臨終」にそれぞれ主人公として出てきますが、両者ともにここでは初登場。

夾山善会（八〇五〜八八一）は河南省の生まれで、のちに中国第一の大湖である洞庭湖の西、湖南省夾山に道場を開き禅風をふるった英傑。洛浦元安（八三三〜八九七）は陝西省の出身で臨済などに歴参したのちに夾山の法嗣となり、夾山に近い澧州の洛浦山で道誉をあげた人で、多くのすぐれた機縁が伝えられています。この「洛浦伏膺」は洛浦が夾山に参じた時、その言動によって屈服帰依した際のもの。



さて、今回からは本誌の組版が変わり文字の制約となったため、これまで以上に「示衆」と「本則」は原文に意識的なルビをふり、それだけ読めば一応理解できる(?) ようにとめました。そこで、以下は要旨を中心とした紹介にとどめます。

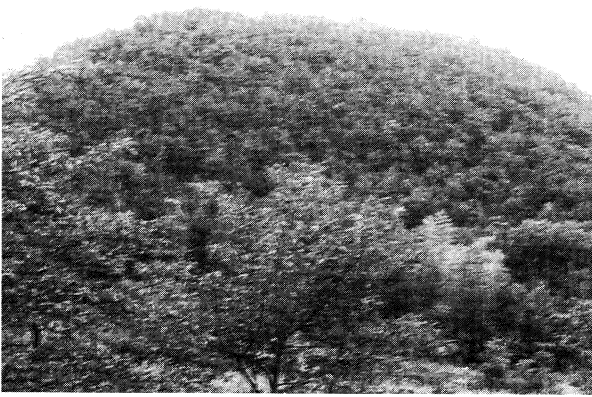
まず万松さんの「示衆」は、「学生接化のはたらきが抜群の大先生でも、一棒を食らってもビクともしない大モノに出会ったかどうか、夾山と洛浦の出会いを示唆しています。

そこでノンフィクションの「本則」。洛浦は夾山に参じた時、挨拶もせず突つ立った。夾山「鳳の巢(立派な道場)に鶏が舞い込んできてダメじゃ、サッサと立ち返れ！」洛浦がへりくだって、どうかご教導をとお願ひ。夾山の「ここには君もワシもおらんのだ」に洛浦がわめくと、「やめな！はすっぱするなよ。君とワシとはな、境界は雲泥(きんぬい)の差じゃ。君はどうやらエライ人の口封じはできて、めったに語らぬホンモノの口を開かせられるかな？」これで洛浦はすっかり夾山に帰依服従することになった。

洛浦は臨済のもとで、もうかなりの力量が認められ「喝」もマスターしていた人物。だ

から夾山に対してもさまざまな臨機応変の対応がとれたのです。だが夾山は一枚上、それを見抜いてなおすごい言葉で伏膺させた。すごい言葉とは「目前に閹梨なく、此間に僧なし」と「無舌の人をして解語せしむ」であり、これがこの公案一則の眼目！

まず前者は、君とワシという相い対立した世界の否定です。対立以前はすべて生きくとしたいのちのはたらきそのもの。自分をなくして、お花になって花を見れば、花が無限に語りかけてくるあの世界です。



夾山の「猿は子を抱いて帰る青嶂の嶺」

また後者は、言葉や分別・感情などにわずらわされない境界の者が、かえって真実の言葉を自在に語ることのすばらしさの教え。悟った人とは限りません。赤ちゃんやネコはまったく正直、神さまですね。

と、こう見ると、禅は正直にすなおになり切った世界。わたくしは中学一年の時、先生から一度だけ鉄拳をくらいました。それでヘシ押られたのは、おのれの増長したナマイキな心。文字通り肝に銘じました。三〇年ぐらいのち、同級生会で招いたその先生にお礼のべたところ、まったく覚えていなかったのには口アングリ。でも、生涯に一度ぐらい、こうした鉄拳は良い薬です。すなおな心をと戻すためにも。

とにもかくにも、かなり深い力量の洛浦がすなおに夾山に伏膺したのも、そうさせた夾山もともにすばらしい。夾山は、道元禪師がこの人の「生死の中に仏あれば生死に迷わず」によって「生死」の巻を著したのは有名。また、禅門第一の書『碧巖録』の名は、夾山禅院の方丈額から採ったとされています。こうした事跡を知って、改めて「本則」を味わうとまたちがいます。万松さんの著語も実に適確ですね。

本来の自己に勝るものなし

—— 第三回成道会 ——

二月四日、第三回成道会が参禅会三名、梅花講二名の参加をえて、龍泉院本堂で行われました。今年も二柱の報恩坐禅の後、梅花講の皆さんの成道会和讃で法要が始まり、



参禅会と梅花講の皆様

問答、法話が粛々と行われました。また、参禅二〇年を讀えて杉浦さんと武田さんに椎名老師の揮毫が贈られました。

毎回成道会では椎名老師より宗門の名僧の方のお話をいただいています。今年は高輪泉岳寺のご開山様である門庵宗関さんでした。以下は椎名老師のお話の概略です。

二月一四日は赤穂義士の討ち入りの日で、四十七士の追悼法要その他が行われています。今日はその高輪の泉岳寺の御開山様であります門庵宗関和尚という方のお話をさせて頂きます。この方は戦国時代に生まれ、江戸時代の始めに七二歳という、その頃ではかなりの長寿を全うされた方です。戦国時代に有力な大名で今川義元という人がいましたが、宗関和尚は今川義元のお孫さんです。また、後に宗関和尚が出家した時、師匠となる方は今川義元の弟の宗寅和尚です。今川家から出家した人は皆「宗」がついています。

今川家は南北朝時代の足利氏の支流で、公家や朝廷との縁戚関係が多く、京都風の公家的な教養を受けたようです。宗関和尚は幼名を若王子というすごい名前をつけられ、八歳か九歳位のとき出家したと推定されます。後

の徳川家康はその頃はまだ松平竹千代といって、今川家に七歳の時に人質にとられ、駿府城の中で暮していました。今川義元の弟の後の宗寅和尚、この人は家康より二歳年上なんです。それからお孫さんになる若王子は家康より八歳年下です。

宗関和尚の若王子や、伯父さんにあたる宗寅和尚と家康との三人がまだ子供の頃、駿府城で遊んだ仲間のようです。これが後々まで影響を大きく及ぼしています。徳川家康が高輪の泉岳寺を建て、その開山第一祖が宗関和尚ですが、非常に俗縁というのが出家の世界にも影響しています。今川家は武田家とは密接な関係があり、今川義元の奥さんは武田信玄の妹です。そして織田と相対していました。

今川義元が桶狭間の合戦で織田軍に大敗し、首を取られてしまった後、今川家はもう没落の一途をたどることになります。その頃、義元のお孫さんの若王子は出家します。宗寅和尚が栃木県の大中寺の住職になっていたため、その導きによって出家したようです。

大中寺は関三利といまして、関東における曹洞宗の三つの大きな役所寺の一つでした。日本全国にその頃二万五千の曹洞宗のお寺があり、大中寺は曹洞宗を取り締まっていく重

要な地位である天下の僧録という地位にありました。徳川家との関係が深いのでそうなったのでしょうか。

大中寺で出家した宗関和尚は、参禅と学問に励んで、三〇年位大中寺でわき目もふらずに修行したようです。最後に宗関和尚がついた先生が、また宗寅和尚です。この頃のエピソードとして次のような話が伝わっています。



ご詠歌を奉詠する梅花講の皆さん

ある日、宗寅和尚が、「釈迦、弥勒はこれ彼の奴である。この彼とは一体誰のことか。」と宗関和尚に尋ねました。お釈迦様或は弥勒菩薩というのは未来永劫のときにお出ましになって、衆生済度する。このお二人が仏教では一番偉い尊敬される方なんですが、そんなものは結局、彼の奴に過ぎない。奴というのは下男みたいなもんですね。その彼とは誰であるかという公案というかテーマを授けられた。聡明な人で修行については厳しい方であつたということですから、その言葉で悟りを開いたのです。

彼とは何かというと、それは要するに「本来の自己」である。そのくらい素晴らしいものはない。誰でも平等に共通して持つているものですが、普段気がつかない。例えば外を歩いて石に躓きそうになれば石を避けて歩く。だけど、石がある、そこへ躓いたら転ぶ、転んだら怪我をする。そんなことを考えていません。さっと避ける。素晴らしいじゃないですか。お手洗に行きたくなった。代わりにあなただ行つて来て下さいと言つたつて代行がきかないんです。代行のきくものときかないものがある。自分というものの、それが本来の自己である。素晴らしい自己、これはお釈迦様であろ

うと弥勒菩薩であろうと、どんな偉いものでも同じなんだ。問題じゃない。このことを「彼」と表現した。確かに彼は素晴らしい。彼に勝るものなし。彼はお釈迦様であろうと、弥勒菩薩であろうと、彼の奴にすぎない。全身でもって受け止められる悟りというものがある、と言うわけであります。

世田谷に豪徳寺という古い大きな寺があります。吉良家が吉良上野介のずっと前、大旦那になって開いた。そこが臨済宗のお寺だつたのを、宗関和尚という素晴らしい人がいるとあるので、曹洞宗のお寺にした。世田谷城の城主が吉良家なんです。初めは城の中に小さな阿弥陀堂があつたのを大きくして、宗関和尚を招いて住職にした。豪徳寺の開祖第一祖はこの宗関和尚なのです。そこで何年か住職をしたようであります。その後、栃木市の皆川城下に傑岑寺という大中寺の末寺があり、その傑岑寺の住職に迎えられた。宗関和尚は第五代目です。これから本格的な布教活動をするんですが、その時はもう六四歳です。因みに傑岑寺時代から宗関和尚の語録が残っています。それから本寺であります大中寺の第一二代住職に迎えられます。一一代は師匠の宗寅和尚です。

それから一時期、傑岑寺へ隠居します。その間も布教教化に邁進されています。元和二年（一六一六年）家康から秀忠に代わった時、今度は東京麻布の長谷寺、現在は永平寺別院として知られている修行道場で、今でも雲水が沢山います。その開山第一祖に迎えられるたのです。そこで三年間活躍をして、晩年の七〇歳、元和五年（一六一九年）の時に泉岳寺の開山第一祖になりました。泉岳寺は、初めは外桜田という皇居の近くにあったのですが、二



〇年しかそこにいなくて高輪に移転しています。恐らく寺の規模が大きくなるに従って狭くなって、高輪の地を選んで移転したのだと思います。その泉岳寺の住職となつて、いろいろと最後の活躍をされるのですが、もう二年後の元和七年、七二歳で、十一月二十六日に亡くなられたわけでありす。亡くなる少し前に

詠んだ歌が残っています。

「見渡せば枯野のすすき身にしみて老いはいかなる夕べなるかも」

宗関和尚の辞世の歌は、今のNHKがあります愛宕山の山麓の青松寺へ、宗関和尚が招かれて行つて、その時に詠んだ歌だそうです。その二ヶ月後に亡くなっています。

さて、宗関和尚の語録が「代語集」という名で一卷残っています。活字にはされておりません。非常に難しい。普通の人ではどうても歯が立たない。非常に学問的な素養が深い方で、特に宋の時代の学問であります朱子学、儒教のほうの哲学、宋の時代の禅宗の学問にたいそう詳しい人です。今でいえば大学者の素養があったということです。

大中寺の古文書にこんなことが書かれています。師匠の宗寅和尚が弟子を連れて御前にまかり出た。江戸城の徳川家康の前です。幼いときの遊び仲間なんです。話をした因みに、家康公が、「宗関和尚、お前さん、法問、問答というのが好きで、得意だそうだけど、法問はこの頃どうですか」と尋ねたところ、お師匠さんの宗寅和尚が、「小僧、お前の手の内はどうだ。」と宗関和尚に聞いた。「私は手なんかありません。私は自由です。」宗寅和

尚は「それが一体自由だといふのかな」と言つた。宗関和尚「私はいやなことはいやとはつきりいうことが自由でござる」と答えた。宗関和尚が恐らく一〇代だったのでしょうか。手がないのはむしろ自由なんですと言つた。

「千兵を得ることは易しい」これは中国の故事にある。宗関和尚は「一将は求め難し。」一人の本物は求め難しというんですね。家康公の前で即座に答えた。家康公は「龍の水を得るが如し」と褒めた。龍は水を得ると生き生きとして活発になる。宗関和尚は「虎の山に拠るが如し。」虎は町にはいないで、山に入れば目はらんらんと輝き我が家にいるが如きで、龍の如くです。そこで、宗寅和尚は「珍重」と言う。宗関和尚は「万歳」と言つたという。こういう面白い逸話が大中寺に伝わっています。

後に、江戸時代の中頃から終りの頃に、曹洞宗の千丈和尚という有名な方が豪徳寺に招かれて、開山第一祖の追悼のお言葉を述べられました。その中に「丁度、木馬が風に嘶くようである。」木馬は生きている人間よりも無心である。心が無いだけ、悟っているんだ。むしろ人間よりも優れている。悟つて、無心の心でもって木馬が風に嘶くようである。雲



宗閑和尚のお墓

水を鍛錬することは非常に厳しい。道場のきまりというものは厳格に守る。ある時は、諸大名達に対しても睨みつける。言うべきことはチャンと言う。大名であろうと平然としておった。雲水の指導方法は殺活自在、活かすも殺すも自在であった。ダメな人間でも生かす一寸高慢なものは殺す。殺活自在であったという禪風は、千丈和尚の追悼文に書かれている通りです。

これら四つの寺の時代に教え示した言葉として六一三の項目が残されています。泉岳寺に住職をした時、「この風光明媚な処で雲水達よおまえさん達は一体何を学ぼうとしているのか。」という質問をぶつけております。「明月に戸を開けば季候はあたたかも秋のごとし。」元和三年一〇月一五日の教えなんです。この

大自然の静寂そのものを、我が心として頂いて、それを躍動する命の根源としなさい。難しい言葉の中にこんこんと分かり易い、一番大切なところを教えています。中世から江戸時代にかけての優れた禅僧の中では典型的な人であるということが言えると思います。

開山第一祖宗閑和尚の命日は一月二十六日です。私は今年、二日後の二八日に宗閑和尚について泉岳寺で一時間に渡って公開講演を行いました。泉岳寺という寺は四十七士で有名になっていますが、それ以前から曹洞宗の三大学問寺として先ほどの芝の青松寺と駒込の吉祥寺とともに有名です。

このお寺で私は昔お世話になりましたので、報恩の一環として皆様にご紹介申し上げた次第です。

只管感謝の二〇年

柏市 杉浦上太郎

昭和六〇年二月二四日。私が初めて龍泉院参禅会に参加させていただいた日で、四二歳のときでした。

当時の私は多くのことで悩んでいました。三四歳で脱サラをして独立、その五年後に睡

眠不足がたたってホームからの転落による大怪我をしたことを契機に継続を断念。再び脱サラ前に勤めていた会社に出戻る。戻ったとたん全く意に染まない組織の責任者に祭り上げられる。不本意な思いや能力不足によるジレンマなどで心が千々に乱れる。そのようなストレス漬けの生活を三年ほど経過し、もうこれ以上耐えられないという思いに至っていた頃です。

ある時期までは、その原因はある特定の人々によってもたらされたものと思つて恨んだりもしていました。が、あるとき突然、そのような道を選んだのは、結果的には自分なのだから、全ての事象は自分の責任ではないのかということに気づきました。やがて、自己の敵は自己なのだ、ということに確信をもつようになりました。

その気づきが動機となつて、軟弱な精神を鍛えなおし、不動心を得る方法はないものかと思ひ、あれこれ見聞した結果が坐禅修行への興味でした。

二月上旬、意を決し、雪の永平寺様を一泊参籠の目的で訪れ、坐禅をさせていただきました。厳肅な雰囲気（元僧堂）にて、緊張一杯の気持で初坐禅を体験しました。

日常生活とは全く違う次元の世界、長年継続されてきた作法の重み、人間の根源の修行等々に大いなる感銘を受けました。

それから数日後、偶然、龍泉院様近くのバス通りを車で通りかかり、龍泉院様入り口の交差点を通過する瞬間、〃坐禅道場龍泉院〃という看板の文字が目飛び込んできました。時折、その道路は利用しておりましたが、それまでは全く気づくことはなかったのですが、その時だけは、その看板が実物の三倍ほどの大きさに感じたのでした。一時の躊躇もなくすぐさま、龍泉院様の門をたたき、椎名老師にお会いし、入門を願い出、許されました。



参禅20年の揮毫を受ける武田・杉浦両氏

世俗の垢にまみれた私ごときが、龍泉院参禅会と縁が結べたことはまさに幸運でした。

爾来二〇年。私は大きな〃安心〃をいただきました。その間、バブル経済の崩壊に伴う企業合併やリストラなど多くの困難なことに直面してきましたが、あまり心を労することなく歩むことができました。これは常に、心の中に価値判断・意思決定の定規をもてたことのありがたさだと思っています。

平成一七年一二月四日の成道会の日、参禅会二〇年経過の記念として、椎名宏雄老師より素晴らしい墨蹟を賜りました。

鮮やかに大書された「全機現」という文字です。「全機現」とは宋代の有名な禅匠の円悟禅師の言葉で、その働きが今ここに余すところなく現成していることである（*一）との由。私の坐禅修行はまだまだ未熟です。この二〇年経過を節目に、また心新たに、「全機現」が体得できるよう坐禅修行に精進して参りたいと念じております。

末筆ながら、改めて椎名老師に深く感謝申し上げます、さらなる導きを切にお願い申し上げます。（三拜九拝）

*一『明珠』第三号、4頁「久参修治の功」の文中より引用

二〇年たって、ひとつ

柏市 武田 博志

成道会で、参禅二〇年の祝いの言葉を老師から頂戴しました。力強い揮毫の額を両手で受けながら、老師からかけられたねぎらいの言葉が胸にしみました。

頂戴した言葉は、「放下著」。

「背負っているものを下ろしなさい」という意味です。重いリュックを背負って峠の山小屋に着いたとき、小屋の主が声を掛けられたような安堵感を覚えます。

龍泉院の門をくぐり、二〇年が経ちました。坐禅は辛く、今もくるぶしの当たるところがブチになり、安楽の法門とは掛け離れた境地の時もあります。それでも、二〇年続けてこられたのは、第一に、老師の『正法眼蔵』のご提唱が面白かったこと、第二に、道友の温かい気持ちに終始囲まれていたこと、この二つによります。

当時のご提唱は、「一顆明珠」の巻。玄沙師備の出家のいきさつを描いた箇所でした。老師に解説いただく仏教説話の面白さは、次回への楽しみとなり、今日に繋がっています。入門して間もない頃、茶話会で高野さんが

老師にお尋ねしました。「日航ジャンボ機が御巢鷹山に墜落し、何の罪もない大勢の人が命を落とすなど、神や仏はいないのでしょいか」。出席者の話が一巡し、最後に老師は、「事故ですからね」と言われた。

それから二〇年たった参禅会のある日、私は坐禅開始の時刻に遅れた。そこで、本堂に入らず控え室のガラス戸を開け、庭先に向かって足を組みました。夏の日差しが照り、すでに陽炎がゆれる地面。その地べたを小さな蟻たちが列をなして横切っていました。そこへ突然、大きな一匹の蟻が列の横から、黙々と歩いてきた小さな蟻を襲った。もぐく蟻を大きな上あごで挟み込み、まもなく、小さな蟻は動かなくなりました。

一部始終を見ていた私は、ふと、二〇年前の高野さんの発言を思い出しました。

「事故とは、こういうこと。小さな蟻を守る神や仏はそこにいない」

事故にあつて命を失った蟻とて親兄弟もいたでしょう。巢穴の蟻全部が大家族一族郎党ともいえます。しかし、残つて命をながらえた蟻たちに悲しがる様子はない。そこに見えるのは、以前のように列をなし、炎天下で必死に生きている姿だけ。それは、昆虫や植物、

その外のあらゆる生き物も同様です。人として一寸先の生に保障はなく、ただ奇蹟に近い確率で、ある時この世に生を受け今を生きているだけです。たったひとつしかない自己を懸命に生きるのは、本来当たり前の事なのです。

ところが、自分自身を省みると、今を懸命に生きている実感はありません。確かに時間に追われるように毎日を過ごしています。しかし、命懸けではないし、いつも全力と言うわけではありません。お釈迦様の仰るように、妄想を断ち執着しなければよいのですが、凡夫は目先の事にとらわれて、気がつかぬままいろいろなものを負い込んでしまっています。今ここで「放下著」を自戒の言葉として意識し実践すれば、手放せるものはたくさんありそうです。そうすればその先に、事故さへ恐れない懸命な姿が現われるのかもしれませんが。二〇年。振り返れば、深いご縁で諸先輩とのたくさんのお会いがありました。掛けていただいた言葉や話が後になって俄然、意味をもつて輝きだすことがあります。そのように折々に得心することと同様、十年、二〇年をかけ、ひとつふたつと得るものは貴重です。これからも、老師や道友にご指導いただきながら、禅の道を歩んでいきたいと思っています。

平成丙戌年頭の参禅

ふじみ野市 石田 七重

昨日から予報以上に雪が降り出し、私の町より南の千葉県の方が更に時間的にも長く、雪の量も上回るとラジオも告げた。実は私は過去に雪道でとても恐ろしい思いを二、三回している。チエーンを着けても百米程で国道に出るのであまり役に立たない。そこで昨年末にスタッドレスタイヤなるものを車に履かせた。その始めての使用が龍泉院の参禅ということ、私にとって大変喜ばしい。それにしてもこのタイヤどれ程信頼出来るか、私には不安、そこで昨日のうちに積った雪道をガソリンを入れるのと予行練習を兼ねてスタンドまで往復。思いの外信頼を実感、あとは関越道、外環、常磐道各高速道路の状況もちよつと不安、余裕をもつて出掛けた。用心したので却つていつもより早く到着。駐車場は深々と真っ白。ドアを開けて降りようとしたが普通の靴の私、どこまでももぐりそう！躊躇して「降りられないーい！」と大声を出したら、運良く猿島の中村さんがいらして玄関まですっかり雪をどけて下さった。そして無事に坐禅。ご提唱の

終りの方での「儀礼をしつかりすると心が整つ」

「何より実践」のお言葉が何やら私に勇気を齎した。茶話会では御老師ご丹誠の沢庵を頂戴、これぞ「禪の味覚」、清らかで美味でした。そして中寫さんご苦勞の『口宣』八号を頂いた。

格別新鮮な参禅日となり真新しい山門を後にした。

・しろがねの雪降る道をひた走り丙戌年頭の参禅にゆく

・冬タイヤ始めて雪道走る朝は今年はじめの参禅日なり

・国道を左に折れるに吾が眼にははろばろ白き世界広がる

・境内の大樹広げし枝々の小さき梢まで雪ぞ降り積む

・雪積もりいづこに足を降ろさむか思案す吾に道友助くる

・深々と真白き世界の境内に恐るる如く一歩踏み出す

・年頭の参禅の後の茶話会に御老師丹誠の沢庵いただく

・積もる雪に道友の一人は自宅よりアイゼンつけて歩き来しとふ

・一面の銀世界となりし参禅日『口宣』の表紙の色に癒さる

お粗末でした。

合掌

いたずらに生きず

ひたすらに生きる

我孫子市 清水 秀男

龍泉院の山門の掲示板に「いたずらに生きず ひたすらに生きる」の言葉があつた。これを拝読した時、警策で厳しく打たれた感じが、全身に電流が走った。それは、まさに現在の自分が、全く逆の「いたずらに生き、ひたすらに生きず」そのままの状態にある事にはつと気付かされたからである。

まず「いたずらに生きている」自分の実態は何であろうかと考えてみると、

① 具体的目標なり夢も不十分で、単にだからと安易に今迄の延長線上の惰性の生活を続けている情けない自分。

② 今生きている事は当たり前とと思っている傲慢な自分。

③ どうせ明日があるのだから今日はこのぐらいでいいのではないかと簡単に妥協してしまっている自分。

④ 思い通りにならないのはすべて他人が悪いからと他人を責め、自己責任を棚上げにしてしまっている自分。

⑤ すべて自分の要求さえ満たされればいいとしている自己中心主義の自分等々。

これ以外にも数え上げれば数限りない。まさに「いたずら」のオンパレードである。これで仏法をまがりなりにも学道しているのか。全く慙愧にたえない次第である。今一度原点に帰り、反省を込めてレビューし、再出発していきたい。

次に「いたずらに生きず」に関し、次の法然上人の言葉を味わいたい。

① 「しかるを いま あいがたくして あうことを得たり いたずらに あかしくらし てやみなんこそ かなしけれ」

(生まれ難きこの世に生まれ、有難き仏縁に恵まれて生かされているにもかかわらず、むなしく日々を過ごし続けていることは何と嘆かわしいことであろうか)

② 法句経一八二番(友松円諦訳)にも次の教えがある。

「ひとの生をうくるはかたく／やがて死すべきものの／いま生命あるはありがたし／正法を耳にするはかたく／諸仏の世に出づるもありがたし」

(人間として生を受ける事は難しく、死ぬべき人々に寿命があるのも難しい事である。正

しい教えを聞くのも難しく、諸々のみ仏の出現される事も難しい事である)

③法然上人の「あいがたくして あうこと」とは法句經一八二番の四つの有難さ(難しさ)、「人間に生まれた事の有難さ」「死ぬべきものが生きている事の有難さ」「優れた教えを聞く有難さ」「仏(真理)に出会う事の有難さ」をすべて包含した言葉だと思ふ。

④父と母、廻れば人間誕生以来の不思議な因縁によりこの世に生を受け、限りある貴重な生を多くの恵みによつて生かされている事は稀有な事実なんだ。しかしながら、すべての事を当たり前と思う傲慢な心、自分が一番偉いと思う驕り、いつ迄もすべてが変わらず存在すると思ふ思い込み等が、真理に目覚める眼を曇らし、むなしい日暮をしているのは何と情けなく勿体ないことではないかと釈迦と法然は我々に警鐘を鳴らしている。

では「ひたすらに生きる」とはどういう生き方であろうか。それは人生の真理を説く仏教の教えに則して忠実に生きる事に尽きると思ふ。

「学道の人 身心を放下して ひたすら仏法に入るべし」(道元)

そこでその仏法の教えを簡単に振り返って

整理してみたい。

仏教の教えの要諦(原理論)・因縁生起の原理によれば、「すべての現象は種々の原因と条件により生じる」。それに基づく眼目は次の三項目がある。

「すべてものは時間的(諸行無常)にも空間的(諸法無我)にも変化する」「すべての事は思い通りにならない(一切皆苦)」「苦惱・迷い・執着を脱した所に心の平安がある(涅槃寂静)」

また、仏教の教えの実践論・四つの真実の教え(四諦)と八正道とは、「苦の実態(苦諦)・四苦八苦」「苦の原因(集諦)・煩惱(むさぼり、いかり、おろかさ)」「苦の脱した状態(滅諦)・涅槃寂静」「苦を脱するに至る道(道諦)・八正道」イ正見・真理を知る、口正思惟・貪・瞋・痴を離れる、八正語・嘘・悪口・中傷等しない、二正業・殺生・盗み・不倫等しない、ホ正命・規則正しい生活をする、ヘ正精進・理想に向つて努力する、ト正念・理想・目標を忘れない、チ正定・心を静め集中する。

この仏教の教えの中から多くの学ぶべきものがあるが、「すべてものは時間的(諸行無常)にも空間的(諸法無我)にも変化する」から、

「ひたすらに生きる」大切さを学びたいと思ふ。

①諸行無常(時間的側面)・すべての現象は時々刻々変化し一瞬も静止していない

②諸法無我(空間的側面)・すべての現象的存在は永遠不変でなく、固定した性質や状態ではない

この無常・無我の教えの素晴らしさの一つは、すべては変化するのだから、いつ迄も執着し・こだわっていても無意味である。従つて、執着や驕慢心を離れ、謙虚な思いやり深い心が芽生えて来る事。逆にいかなる困難な事も精進し努力さえすれば、目標を實現出来る可能性も拓けて来、暗いと思つていた運命すらも転換出来る事を示してくれる点である。もう一つは現在の一瞬一瞬は掛け替えのない永遠の今であり、一期一会である。

「明日ありと思ふ心の仇核、夜半に嵐の吹かぬものかは」(親鸞)

従つて、今、ここにおいて悔いのない様、最善を尽くす必要がある事を教えてくれる点である。まさに釈迦の入滅前の最後の言葉、「もろろの事象は過ぎ去る。怠ける事なく修行しなさい」は、まさにこの辺りの消息をずばり表現したのと言えらる。従つて、「ひたすらに生きる」とは、無常・無我の教えを毎日

の日常生活において、倦まずたゆまず実践する事だとあらためて思う。

自分がなすべき仕事、自分らしさが発揮出来る仕事を、精魂込めて、工夫をこらし、努力を重ねて、結果を考えず愚直に、一生懸命に行ない、二度と来ない今という瞬間瞬間に全力を傾注して、一〇〇%燃焼させていく。そこに自分自身のいのち・精神・人格の高まりがあり、純化があり、輝きがあるのではないだろうか。

「いたずらに生きず ひたすらに生きる」の言葉は、原点に返り、自分自身を見つめる有難い絶好の機会となった。

最後に今から四〇年前、私が実社会に出た時、よく歌われていた「若者たち」の歌の中から、私の「ひたすらに生きる」糧の一つになっている一節をあげておきたい。

君の行く道は 果てしなく遠い

だのになぜ 歯をくいしばり

君は行くのか そんなにしてまで

君の行く道は 希望へと続く

空にまた 日が昇るとき

若者はまた 歩き始める

以上

曹洞宗「歳末助け合い」に参加

毎年年末の恒例になった柏駅前での、曹洞宗千葉第二教区による歳末助け合いの托鉢に、龍泉院参禅会から椎名老師のほか、安本さん、杉浦さん、今泉さんの四名が参加されました。

平成一七年一月二六日午後〇時三〇分に長全寺に全員集合し、本堂前で般若心経をお唱えした後、二列縦隊で商店街を通り柏駅東口まで歩いていきました。到着後それぞれ持



托鉢中の椎名老師

ち場につき、多数行きかう人達に向かって、静かに読経をしながら助け合いの募金呼びかけました。

冬の弱い陽が差す雑踏の中で、午後一時から四時まで行われた托鉢で集まった浄財は、約一〇万円に達しました。

曹洞宗千葉第二教区による歳末助け合い

の托鉢行が、柏市の年末行事としてマスコミにも取り上げられるよう、今年の暮は報道機関に働きかけて行きたいと思います。

新年会

今年も二月一〇日午後二時から柏駅前の木曾路で新年会が開催されました。

最初に椎名老師からのご挨拶があり、その中で宗教人類学者で『仏力』の著者でもある佐々木宏幹先生からのお手紙が披露されました。お手紙には中寫さんの巧みな編集・石田さんの見事な毛筆で飾られた『口宣』を毎号送りいただき感謝しています、とのお言葉が書かれていました。誇るべき『口宣』を無償で作成されているお二方に改めて感謝申し上げます。

また、お釈迦様もサンガがあったからこそ布教ができたので、龍泉院参禅会も法友と共に発展させて行きたい、皆さんもサンガの一員であることを自覚して欲しいと述べられました。

ご老師からのご挨拶の後、歓談に移り、皆さんからはお酒の勢いも手伝って、日ごろあまり聞かれない貴重な(?)ご提唱や人生訓などを聞くことができました。

会員便り

四月八日(土)の花祭りに、午前一〇時より龍泉院山門落慶式がとり行われます。参禅会から有志の方がお手伝いに来山されます。山門落慶法要だけでなく、報恩開山忌(四五〇回忌)なども行われますので、お時間のある方は落慶式参観にお出かけになられては如何でしょうか。

子供の頃花祭りで甘茶をいただ

いた方は多いと思いますが、大人になつてから花祭りを見に出かけた人は少ないのではないのでしょうか。キリストが生まれたクリスマスは大いに盛り上がるのに、お釈迦様の生まれた日を祝う花祭りが今ひとつ盛り上がりがないのは何故でしょうか。

この機会に山門の落慶と合わせて大恩人であるお釈迦様の誕生をお祝いしたいものです。

龍泉院参禅会簡介

一、日時

毎月第四日曜九時より(初参加の方は八時半までに来山のこと)、四月は八時半より座禅作法指導

一、座禅

第一 口宣、座禅三〇分
第二 座禅三〇分

一、講義

木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『正法眼蔵』の提唱を聞く。三月より「礼拝得髓」の巻

一、座談

自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散

一、参加資格

年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます

一、会費

無料

一、成道会座禅

月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜(本年は二月三日)釈尊の成道を讃えて坐禅、成道会法要後、法話を聴取、点心を共にする

一、一夜接心

六月上旬(本年は六月四・五日)、一泊し、七の座禅とご提唱を聞く

沼南雑記

参禅会記録(内は座談の司会者)

平成一七年

●九月二五日

●一〇月二三日

●十一月二八日

●十二月四日

●十二月二五日

●二月一〇日

●二月二七日

●三月一〇日

●三月二七日

●四月一〇日

●四月二七日

●五月一〇日

●五月二七日

●六月一〇日

●六月二七日

●七月一〇日

●七月二七日

●八月一〇日

●八月二七日

●九月一〇日

●九月二七日

●十月一〇日

●十月二七日

●十一月一〇日

●十一月二七日

●十二月一〇日

●十二月二七日

●一月一〇日

●一月二七日

●二月一〇日

●二月二七日

んだ阿波野青敏の句があります。

「雪の音警策の音永平寺」

▼女性登山家の田部井淳子さんは登山で最も怖いのは冬山の雪崩であるという。私共の百名山も九九座を踏破し、今まで事故もなく登ってきたことに大変満足している。

添田さんと、残す富士山を登り今年完登としたいものです。

▼これまでの『明珠』は、文字が小さく読みづらい方が多数おられたと思います。椎名老師と編集委員で、文章の量は少なくなつても、文字を大きくして読みやすいように工夫することになり、今回のスタイルになりました。椎名老師による『従容録』のご提唱は、従来と比べて原稿用紙一枚分程度少なくなり、ご苦勞をお掛けすることになりました。新しいスタイルの『明珠』についてのご意見ご感想をお待ちしています。

▼次号は四五号となり特別号を出す予定です。参禅会三五周年にもあたりますので、皆さんから特別号の編集について、アイデアを募集しています。年番幹事が編集委員に企画案をお知らせ下さい。

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)

(秀嗣)